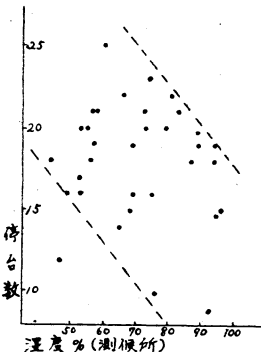


第4図 停台数と温度 (昭和29年8月)

る。一般に冬期は温度が低下すると糸切れが多くなるのは業界の常識で、数字でもかなりよくでている。しかし第4図の夏の例では点がバラツキははっきりしないが、傾向としてはあまり高い温度(30~35°C)では糸切れが多いことを示している。

(3) 停台と湿度

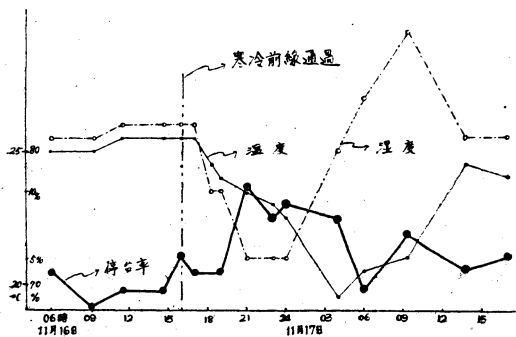
次に湿度であるが、これは噴霧器があるので簡単に調節でき、ある程度適湿に保つことが可能である。ただあまり低温だと霧が気化しないで効果が少ないことがある。夏は工場を開放するので測候所の湿度を用いて停台数との関係を調べた。その1例を第5図に示す。これによるとやはり点がばらついてははっきりしたことはわからない。ただ傾向として、やはり湿度が低いと停台数は多くなるようだ。これが冬となると、測候所の湿度と工場内の湿度とは著しく違うので、正確な湿度の実測がなく調べることができなかったが、もし工場内の実測湿度があればかなりよい関係がたてられようと考えられる。



第5図 停台数と湿度 (昭和29年6月)

(4) 停台率と寒冷前線

本年11月16日、日本海にやや発達した低気圧があり、これより南下する寒冷前線が通過したが浜松(測候所)においても16時10分風向が南より西に急転し、気温は19°~14°Cに急降下して、前線の通過を示した。この時前記工場では測候所の通報にもとづいて毎時間おきぐら



第6図 寒冷前線通過による温湿度と停台率の変化

いに温湿度と停台率を観測したが、これを図に表したのが第6図である。これを見ると、前線はこの工場付近を17時頃通過したらしく温度、湿度が急降下している。それからややおきて停台率が急昇している。工場は外気を遮断するようにしているが、やはり外の気象の急変に影響されている。そしてそれが糸切れにはっきりひびいていることはいかに温湿度が関係しているかということを示すものだ。立派な設備をもつ大工場は別として普通の工場ならば大なり小なりこれに似た影響を受けたであろうと考えられるが、これについても気象通報を利用すれば何等かの対策が立てられるものと思う。

4. む す び

今回の調査はある特定の工場について行ったもので、これをもって一般的な関係とすることはできないし、また結果もまだ定性的の域を脱していない。工場によって機械も建物の構造も織布の種類もちがうから当然ちがった結果がでるであろう。したがって今後さらにいろいろのケースについて調査を進めなければならない。

雲鏡欄および地方だより写真への原稿募集

1. 今まで評判のよかった雲鏡欄を開放し、全会員からの投稿によって、全会員の自由な声の交流を行うことを念願としております。堅苦しく考えないで、思ったことをそのまま投稿して下さい。ただし、字数は580字から600字までの間に御趣旨を集約して下さい。
2. あるいは孤島で、あるいは都市の中で、気象観測やその地方特有の災害対策のために従事し、調査研究を片手間に行っている会員。また、その大学でなければならないような設備あるいは環境にあって特殊なテーマを追求している会員の環境を、地方だよりとして投稿して下さい。写真2、3葉添付し、原稿用紙で2、3枚程度の長さでお願いします。
3. 珍しい気象現象があった場合には、できれば、その写真も添えて、機を逸せず、なるべく早く投稿して下さい。

訂 正

3巻1号中、1955年10月1日新潟大火の写真の中で、大きな誤をしましたが次の通り謹訂し、原稿を送って下さった方および読者諸兄に対し、お詫び申し上げます。

誤 正

| | |
|------------------------------|------------------------------|
| 第1図 焰上初期 (川瀬二郎撮影, 3時20分) | 第2図 延焼拡大期 (中野徳治撮影, 4時30分) |
| 第2図 延焼拡大期 (中野徳治撮影, 4時30分) | 第1図 焰上初期 (川瀬二郎撮影, 3時20分) |